

見たい聞きたい知らせ隊 Q 隊員が行く!

VOL.10

【発行】令和6（2024）年2月2日
【作成】五泉市地域おこし協力隊 邱子菁
◎取材にご協力くださった皆さま、
ありがとうございました!

日本で新年一番 早く舞われる神楽 蒲原神楽 《奉納編》

かんばら かぐら



「大神楽」獅子舞

だいかぐら
踊り手が「よー!」と言い、獅子頭を被ったとたん、太鼓・三味線・笛の音と共に周りを見回るように動き出しました。獅子は時折幕布を身に被ったり、幕を丸めて手に持ったりしながら、可愛らしく、いきいきと動きました。太鼓のテンポが変わると、手拍子に合わせて歌い手が神歌を歌いだし、雰囲気が一変しました。歌と口上の内容から、悪疫退散のための神楽であることが分かります。話を伺うと、この日は昨年松久会に入会した2名が務めたとのこと、まさに初舞でした。

2024年1月14日、五泉市下大蒲原地域の神明神社にて、20名ほどの地域住民が見守る中、蒲原神楽が奉納されました。取材をさせて頂いた蒲原神楽保存会「松久会（しょうきゅうかい）」の岩野和範会長によると、以前は元旦に日付が変わったら舞を奉納することから、「全国で一番早く舞われる神楽」と言われていたそうです。今年は元旦の夜中ではなく、1月の別日に初舞として奉納されました。（※神楽の日程は年によって変わる場合があります。）
この日は「大神楽」をはじめ、約30分間に4つの演目が奉納されました。



しんぼこうだいじ 新保広大寺（手踊り） 和尚の恋物語由来の新潟民謡

「新保広大寺」は新潟県の民謡で、元は十日町市の新保部落にある「広大寺」の和尚の恋物語として語られた話を地元の人々が唄い囃し立てたもので、後に読売りや飴売りなどの手を経て、流行唄として全国に広まりました。津軽じょんがら節や群馬の八木節、北は北海道、南は九州地方でみられる「ハイヤ節」の元唄ともされているようです。

ピカピカの獅子頭 村上市の職人による二代目



演目が終わり、獅子頭をかぶせてもらう子ども

現在の蒲原神楽で使う獅子頭は実は2代目です。平成7（1995）年4月に新潟県民俗芸能育成推進事業の一環として、老朽化した獅子頭と天狗のお面を村上市の職人の手により新調しました。なお、初代の獅子頭は五泉市村松郷土資料館で展示されています。

けんぶ しばうぎり 剣舞（四方切）

悪魔を断ち切る火伏の舞
剣舞は経験豊富な4名が踊り手を務めました。剣と鈴を持って、立ち位置を入れ替えながら、四隅に散ったり、真ん中に集まったりして、一糸乱れぬ動きを披露していました。熟練の舞いの姿がとてもかっこよかったです。歌詞には悪魔を断ち切り、悪疫を退散させ、家内安全を願う言葉が含まれ、「火伏の舞」とも言われています。



おけさ 最後を締めくくる手踊り



最後の演目は、柏崎おけさが元唄となっていている手踊りの「おけさ」。踊り手全員がそろって踊りました。

神楽を奉納した下大蒲原地域の神明神社↓



次号(VOL.11)は蒲原神楽の歴史を遡る《歴史編》!